

---

# 痛勇者

三木本かめお

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

痛勇者

### 【Nコード】

N9275V

### 【作者名】

三木本かめお

### 【あらすじ】

その国には、勇者と呼ばれる男がいた。たぐい稀なる才能を持ち、武術にも魔術にも長けた、神に愛された青年。にもかかわらず、その素顔を知る国民は数少ない。なぜなら彼は、ひきこもりでオタクで中二病のとんでもなく痛い子だったから……。これは、究極の痛勇者に引きずりまわされる新米兵士の、ファンタジックな冒険物語である。

## 第一話：先立つ不孝をお許してください

歩きながら、右手の腕輪に目をやる。

今月、晴れて王宮兵士となった僕に、両親がプレゼントしてくれたアイテムだ。

魔法障壁効果の付与した、それなりに質のいい品である。

値段にすれば、五万ゴールドはくだらないだろう。

まだ弟や妹もいて、家計は決して楽ではない。

それでも僕の身を案じてくれる親の愛情には、感謝し尽くしてもしきれない。

お父さん、お母さん……。

僕の初仕事となる今日の任務、必ず成功させて見せます……。

街から外れ、家もまばらになってきた田園地帯に、それはあった。

「お、あれですかね？ 勇者様の家は」

今回の任務の目的地、勇者様の住む家である。

とはいえ、それはどこにでもある普通の住居だった。

「あゝ、みたいですね」

返事をしたのは一緒に任務を任された魔導師の女性、ネムだ。

間の抜けた声にしる、眠そうな目にしる、

一流の魔導師らしいのだが、そうは見えない。

頭にかぶったフードから、カールのかかった黒髪と、まだあどけない顔がのぞく。

実力はともかく、のんびりとしたおおらかな娘で、

可愛らしい印象である。

「あの、ネムさんは、王宮で何のお仕事をされてるんですか」

「魔法研究室で働いているんですよ。今年の初めからで、まだ新米さんですけどお」

あれ？ 新米？ 一流の魔導師だと聞いていたが、違っのだろうか。

いや、新入りだが一流と評されるほどの実力、という超エリートの可能性もある。

一体どんな仕事をしているのか、聞いてみることにした。

「研究室ではどのようなお仕事を」

僕が尋ねると、ネムはこちらに黒い大きな目を向け、

頬に指を当てて答える。

「うん。主に、お掃除とか、お荷物運びとかですかね」

お掃除？ 荷物運び？ 思いつきり下働きではないか。

任務前、隊長は確かに、優秀な魔導師を同行させると、そう言っていたはずだ。

何かの手違いだろうか。いや、今更あわててもしょうがない。

もうここまで来ているんだ。何が何でもこの初任務は成功させなければ。

僕は不測の事態に、むしろモチベーションを高める。

魔王討伐に赴く勇者様を王宮まで案内する、それが今回の任務である。

確かに大役ではあるが、考えてみれば優秀な魔導師が必要な場面などなさそうである。

かくいう自分も、新米兵士ではないか。何の問題もないのである。

しかし、それはそれで疑問である。

勇者様を案内するのが、なぜこのような兵士と魔導師の二人なのか、ということである。

案内といっても、ここは安全な城下町の中だ。

本当なら、格の高い大臣や行政官が出向くところではないのか？

そんな疑問を、僕は何となく口に出してしまった。

「しかし、何で勇者様を迎えに行くのが、僕たちなんでしょうね。

もつとお偉い方たちが行った方がいい気がしますけど……」

ネルが、本当ににつこりと笑ってその問いに答えた。

「そりゃあ、あの腰抜けどもには勇者のおウチなんて、怖くて近寄れませんから」

え？ 今なんと？ 一瞬自分の耳を疑う。

目の前の、素朴で可憐な少女（推測）であるネムが、何かとても恐ろしいことを口走った。

「なんですって？ 腰抜けども？」

一応確認してみる。

「ええ、あの爺さんたちが偉そうな顔していられるのなんてえ、王宮の中だけですよ」。

いざ前線に出せば、ブルツちゃって役に立ちませんから。クスッ、クスッ、じゃねえよ！ 怖えよ！

心の中では激しく突っ込みを入れるが、たぶん僕の顔はひきつつている。

何かがおかしいと、僕はもうとっくに気付いていた。

「あ、あの、お詳しいんですね、王宮の事情に……」

なんかもう自分でもよくわからない相槌を打つ。

「ええ、大臣たちから研究費をせしめるのもお、私の大事なお仕事ですもの」。

部下の研究員たちに、ひもじい思いはさせられませんし」

ネルは顔の前で軽く手を合わせ、可愛いポーズで答える。

「部下？ ネムさんは新入りで、まだ下働きしてるんじゃない？」

お掃除とか、荷物運びとか……」

「あゝ、確かにですね、最近は失敗作の魔法生物のお掃除ですが、

暴れる被験者の運搬だとかがハードワークで……」。

もうそっちがメインのお仕事みたいになっちゃってるんでえ」

なるほど、全て分かった。バラバラのピースが繋がった。

勇者が何者かは知らないが、今日の前に見えるあの家は大臣たちが近づくのも恐れるような危険地帯なのである。

いや、もはや「勇者の家」という名のダンジョンか何かだ。そうに違いない。

そしてネムは前線でも戦える「超優秀」な魔術師で、

僕は何も知らずノコノコとやってきた哀れな犠牲者なのである。

そういえば聞いたことがある。入隊直後の兵士がよく行方知れずになっっているらしい。

確か母親もそんなことを言って、初めは入隊に賛成しなかったが、どうせデマだと、あのときの僕は聞く耳を持たなかった。

ごめん、カーチャン、馬鹿な息子で……。

「ところで、アレンさんはどうしてここに来たんですかあ？

見たところ、わざわざ勇者に会いに来る理由なんてなさそうですけど」

「いや……あの、任務で、勇者様を王城まで連れて来いって……。

魔王討伐に……」

「あはっ、じゃ～アレンさんって貧乏くじ引かされちゃった人なんですね」。

可哀そうです、まだ若いのに、明日の日の出も拝めないなんてえ」

笑ってるのか憐れんでいるのかよくわからない表情で、僕はネムに死刑宣告されてしまった。

ああ、アレンってのは僕の名前だ。これから死ぬ者の名前になど、誰も興味はないだろうが。

お父さん、お母さん、先立つ不孝をお許してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9275v/>

---

痛勇者

2011年10月9日02時51分発行